

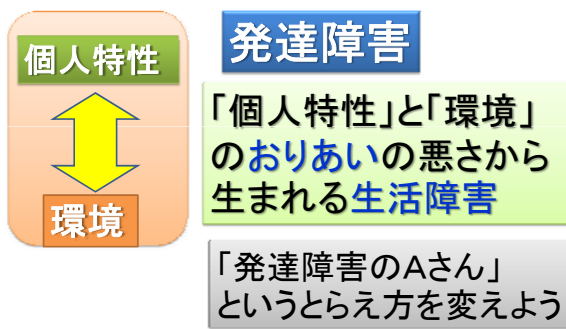
卒業後に向けた支援 就職支援、進路支援



高橋 知音

- 大学は社会に出る前の最後の教育機関
- 「卒業させる」支援でなく「卒業後の自立」を見据えた支援を目指したい
- 「就職支援」でなく「進路支援」
- 大学ができることの限界

「個人特性」と「環境」のおりあい



今の専攻でよいのか？ 転学部・再受験

- 高校は「オールラウンド型」の学習
- 大学は「スペシャリスト型」の学習
- 発達障害のある人は「得意なこと」と「苦手なこと」の差が極端
- 大学の学習で求められるスキルと「得意なこと」が一致しないと苦しい

転学部・再受験

- 「コミュニケーションが苦手」な人が医師、看護師、教員、保育士など、人と関わる専門家を養成する学部でやっていくのは厳しい
- 「数学や物理学が苦手」な人が工学系でやっていくのは厳しい
- 専門の根幹の部分での「配慮」や「免除」は難しい

転学部・再受験

- 新しい方向性を探る
- 「得意なこと」を活かせるのはどこか
- 力を発揮しやすいのはどのような授業か
 - 教養系の授業でうまくいった授業はあるか
 - 他学部の教員に相談し、授業を受講させてもらう

転学部・再受験

- 「今うまくいっていないからやめたい」
- 「漠然と別の学部ならうまくいくのではないか」という考えでは失敗のリスクも大きい
- 自分の「個人特性」を理解していることが前提
- 支援者と時間をかけて相談することが重要

大学院進学

- 「就職できないからとりあえず大学院」という進学の仕方は避けたい
 - → 大学院に進学することで将来の可能性が狭まることもありうる

進学がうまくいくパターン

- 学生の特性に理解のある指導教員や研究室仲間とともに、専門性を高める環境がある
- 教員がその学生にとって力を発揮しやすい、就職先を紹介してくれる可能性がある

事例Aさん

- 自分の経験していないことをイメージするのが難しい
 - 相手の立場に立って考えることは難しい
- 多くの要素を総合的に判断するのが難しい
 - 子どもが好きだから保育士になりたい
- あいまいな指示は理解できない
- 状況に応じた判断ができない
- 相手の意図、感情を理解するのが難しい

9

事例Aさん

- 具体的な職業のイメージが持ちにくい
- 仕事の一側面しか見えない
 - 自分の興味関心優先の非現実的な希望
 - 表に見えない部分の仕事を想像することができない
- 仕事を知ることが必要
- 自分を知ることが必要

10

事例Aさん

- 同じ作業を根気よく続けることができる
- 図に示した情報はよく理解できる
- 具体的な指示があれば、正確にこなすことができる

11

「環境」としての職場との「おりあい」

- 難しい職場
 - 高いコミュニケーション能力が要求される職場
 - 臨機応変、柔軟な対応が求められる職場
 - 異動の多い職場
- 向いている職場
 - 正確さ、安定性、継続性、根気が求められる職場
 - 個人作業が中心の職場
 - 「こだわり」と業務内容が結びついた職場

12

事例Bさん

- 指示の聞き漏らし、聞き間違いが多い
- 集中力が続かず、一つの作業が完成しない（他に意識が行ってしまう）
- 優先順位がつけられない
- 整理整頓が苦手、ものをなくす
- 十分に考えず、思い立ったらすぐに行動に移してしまう
- 遅刻が多い

13

事例Bさん

指示を文章＋文字で提供
チェックリストを作成

必要なものは常に持ち歩く

行動にうつすまえに予想される結果をシミュレーションしたり、紙に書き出したりする

1日の流れ、やることをフローチャート化する

14

「環境」としての職場との「おりあい」

- 難しい職場
 - ちょっとしたミスが大きな事故につながりやすい職場
 - 正確さ、安定性、継続性、根気が求められる職場
- 向いている職場
 - プロジェクト型で短期集中型の業務
 - クリエイティブであることが求められる職場
 - 興味・関心があることを続けられる職場
 - 臨機応変、柔軟性が求められる職場

15

就職支援

- 継続的に支援している学生
 - 早い段階から、自分の得意・不得意の理解、職業の特徴理解を進める
 - 職業体験をすることで、自身の課題の明確化、一般就労の可能性を検討
 - 一般就労が困難と判断したら、早期から障害者就労関連の専門機関との連携をはじめる

就職支援

- 就職活動の段階ではじめて困難に直面
 - 面接対策だけでは対応しきれない問題があると判断したら、そのことを伝える
 - 学生の意思は尊重し、継続中の就職活動はできる限りサポート
 - 失敗経験をいっしょに受け止め、その意味を一緒に考える
 - 「なぜうまくいかないか、どうやったらうまくいくか、詳しく調べながら、検討したい」
 - 「発達障害かもしれない」といった伝え方はしない

障害枠での就労の可能性

- 就労場面では、不得意の程度に応じて配慮を求めるにも限界がある
- 障害があることを認定された人に配慮する雇用主に対し、障害のある人が働きやすい環境を整えるために必要なコストを公的に負担するしくみ

我が国の障害者就労支援制度

- 障害者に関する手帳制度
 - 障害の有無とその程度を証明する公的書類

| 発達障害者支援法 | 身体障害者福祉法 | 知的障害者福祉法 | 精神保健及び精神障害者福祉に関する法律 |
|-------------|----------|-----------|---------------------|
| 発達障害者手帳制度なし | 身体障害者手帳 | 知的障害者療育手帳 | 精神障害者保健福祉手帳 |

19

我が国の障害者就労支援制度

- 障害者の雇用の促進等に関する法律
- 「職業リハビリテーション」
 - 障害者に対して職業指導、職業訓練、職業紹介その他この法律に定める措置を講じ、その職業生活における自立を図ることをいう

20

我が国の障害者就労支援制度

- 職業リハビリテーションサービスの種類
 - ① 職業相談・指導
 - ② 職業評価
 - ③ 職業訓練
 - ④ 職業準備支援事業
 - ⑤ 職業紹介
 - ⑥ 就職後の援助
 - ⑦ 事業主援助

21

我が国の障害者就労支援制度

- サービスの提供機関
 - ① ハローワーク
 - ② 地域障害者職業センター
 - ③ 障害者雇用支援センター
 - ④ 障害者就業・生活支援センター
 - ⑤ 障害者職業能力開発校

22

目的別、発達障害のある人が利用できる就労支援機関

- 相談にのってほしい
 - 地域障害者職業センター
 - 障害者就業・生活支援センター
- 就職に向けた準備をしたい
 - 職業能力開発校
- 就職先を紹介してほしい
 - ハローワーク

23

地域障害者職業センター

- 職業相談
- 職業評価
- 職業準備訓練
- 職場適応援助者による支援
- 職場適応指導
- 事業主支援
- 職業リハビリテーション計画の作成
- ナビゲーションブックの作成
- サービスを受けるのに手帳は不要

24

障害者就業・生活支援センター

- 地域で、他機関と連携しながら、就業、日常生活、社会生活上の相談・支援

専門機関につなぐステップ

- 「大学の支援者」と「学外の支援者」がそれぞれどのような役割で、何を目標に支援するのか、学生が理解できるように説明する
- 大学の支援者は学生の了承を得て、これまでの検査結果や相談の経緯などを学外の支援者に伝える
- 可能であれば支援会議を開き、本人も交えて支援の方向性を共有

「次につなぐ」支援

- 大学での支援者の目標は「大学でうまくやっ
ていけるようにすること」、「卒業できるように
すること」
- 卒業後も社会的自立まで時間がかかること
が想定される場合は、「どう生活していくか」
が課題となる
- 大学での支援者は学生と一生涯あえるわ
けではないが、卒業後の生活の見通しをつけ
る作業は在学中にもできる

「次につなぐ」支援

- 支援ネットワークを途切れさせないための移行
作業
- 卒業後の支援者への引き継ぎをおこなうこと
が重要
- 卒業後の生活の場で、支援全体の設計図を描
く支援者を見つける
- 「障害者就業・生活支援センター」、「障害者総
合支援センター」、「障害者自立支援センター」
など